いるはずだ。手のとどかない夢ではない。地球が一回転すれば、誰も、家のなかにはいないだろう。すべての人間が光と戯れているだろう。まちがいはない。100日間で溜ったエネルギーの量はおそろしい。光を浴び、透明な空気を吸い、声をあげて笑い、人々は走り廻るはずだ。

仕事は終った。ゴルフの素振りの真似をする者、水泳のフォームをつくる者、屈伸運動をする者、腕立て伏せをする者と様々だ。人間も動物だ。動く物ということだ。食べれば、エネルギーを放出しなければならない。動くためにはエネルギーを補給しなければならない。

青空だ。屋内にいる者は、阿呆か、病人か、金もうけだけに興味のある者だ。

X氏は、雨傘をもって帰路についた。

身体じゅうから汗が吹きだした。温度は35°Cをこえた。石が燃え、樹木が燃え、光のなかであらゆるものが発光しているようだった。朝には濡れていた路上の石が、もう、白く乾いていた。光は白いワイシャツを通して肌を刺した。素肌は長雨で弱っていた。表面がひりひりして、火傷をした。カラスアゲハがアスファルトの上で死んでいた。一斉に蟬たちも鳴きだすだろう。

いつもの8月が帰ってきた。

夏が燃えはじめていた。光と熱の波が大きなうねりの織物になって、幾重にも地表に押し寄せていた。光はあらゆる物質表面に衝突して、乱反射をくりかえしていたが、2つ3つと質量もないニュートリノがわが地球の地核を貫き、おそろしいスピードで宇宙空間へと飛び去っていった。

X氏は、泡となって飛び交う声の群れのなかで、奇妙な声を聴いた。駅前広場で足をとめると、ふと、海のきらめく、埋立地の方に視線を流した。X氏の足は、勝手に、海の方へむかって歩きはじめていた。

急な斜面にまでぎっしりと家が建ち並び、家と家の間に無数の細い通り道があった。階段を下って、坂の底に着くと、緑色の私電が陽をあびてゆっくりと走っていた。踏み切りがあった。レールを跨いで渡った。妙に足の裏がひりひりした。雨傘の柄を握っている左手が汗ばんでつるつる滑る。新しい道を歩く楽しみと不安が同時にX氏を襲った。時間はたっぷりとある。どこをどう歩いてもよい。水に浸っていた草が地面に貼りついている。2、3日もすれば起きあがるだろう。草の力は根強い。猫が日かげで伸びをしている。子供たちは、棒切れを振り廻し、黄色い声をあげていた。

いたるところで水は撤退を開始していた。畑の土が濃い。キリギリスが鳴いている。昆虫たちは、100日の長雨で死に絶えたのではなかったか。彼等は、長雨の間、どこで、何をしていたのだろう。

波を打つ丘が大きく括れて、人家の様相が一変した。サラリーマンたちが棲む建売り住宅でもなく、農家の構えでもない。平家の、入口が狭く、奥行きのある家は、漁師のものだった。埋め立てで漁場を失った漁師たちだが、路上で腕を組み、煙草を吹かしながら空を仰ぐ男たちの顔は、漁師